
とあるタイムトラベラーの手記

ceryeti

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるタイムトラベラーの手記

【Nコード】

N81960

【作者名】

c e r y e t i

【あらすじ】

これはとあるタイムトラベラーの手記である。

そう遠くない未来、突如として完成したタイムマシン。その初期テスト要員が記した回想録である。

救いのない絶望と不条理を背景に、

妄執、狂人、偏執狂、殺人狂たちの百鬼夜行。

多世界解釈、300人委員会、人間牧場計画、そして核戦争。

描かれるのは地獄絵図。

単なる一テスト要員だった主人公は、タイムマシンのもたらす狂気を目の当たりにすることになる。

これは、陰惨で残酷な数知れぬ物語のひとつ。

帰る場所を失い、すべてから見捨てられた男の物語。自分とはなにか。罪とはなにか。

これは、時空の放浪者となった男の絶望の物語。男の物語には、どこにも救いはない。

これは、惨めな物語である。

序（前書き）

吉沢一衛という架空の人物が手記を訳した、という設定の小説です。

序

とあるタイムトラベラーの手記

吉沢一衛 作

（序にかえて）

訳者より

これはとあるタイムトラベラーの手記である。

そう遠くない未来、突如として完成したタイムマシン。その初期テスト要員が記した回想録である。

私は現代の秋葉原に現れた彼と出会い、この分厚い手記を託された。ひとりの哀れな男の苦悩を描いた自作の小説である。彼はこう言って私に手記を渡した。内容は小説とは言っても回想録の体裁をとっている。

私が彼と交流を持ったのはほんの短い間のことで、会ったのも数えるほどしかない。外国からこの秋葉原を訪れ、彼はなぜ数度しか言葉を交わしていない私にこの小説を託したのだろうか。

小説？

この回想録は本当に創作だろうか。

絶望にうちひしがれた時空の放浪者。私が見たのはこの回想録の

主そのものの姿だった。

あるいは単なる手の込んだフィクション。

あるいは壮大な妄想。

そう考えるのが自然かもしれない。だが少なくとも私は信じている。この絶望の淵に突き落とされたひとりの男の物語は、彼の体験した紛れもない真実なのだ。

救われない長い長い時空の旅の末に、彼はこの現代の秋葉原でなにを思い、なにを見ていたのだろうか。

手記の持ち主の名はバベクロス・バシヤという。2038年5月、回想録は彼がある秘密任務のためにそれまでのベースを去るところから始まる。

これは、陰惨で残酷な数知れぬ物語のひとつ。

帰る場所を失い、すべてから見捨てられた男の物語。自分とはなにか。罪とはなにか。

これは、時空の放浪者となった男の絶望の物語。男の物語には、どこにも救いはない。

これは、惨めな物語である。

吉沢一衛

第1話（前書き）

作者名は架空の人物です。
話数の区切りは適当です。

第1話

とあるタイムトラベラーの手記

吉沢一衛作

> i 1 4 3 0 0 — 1 9 8 5 <

2038年5月25日

先日の通達に従い、私は住み慣れたシアトルの街を離れて東海岸への路についた。例によって配属先はまだ知らされていない。ただニューヨークに來いというだけだ。東部方面となると配属先はいくつか頭に浮かぶがどれも憂鬱だ。東海岸のあどこか湿った雰囲気、とてもじゃないが私を歓迎してくれるようには思えない。家族はシアトルに置いてきた。妻のレイチエル、娘のアリス。今までも週に一度しか会えなかったが、これからは会えるかどうか目処が立たない。軍人という仕事柄、仕方の無いことだと私は思えるが、あの二人には不憫な思いをさせている。これもまた毎度のことだが任期は伝えられていないし任務の内容ももちろん一切知らされていないのだ。

2038年5月27日

ニューヨークの集合場所から連れていかれたのは陰気なぼろホテルだった。任務は1ヶ月もかからないとすぐに言われた。次のことはまだ聞いていないがシアトルにも案外早く帰れるかもしれない。しかし築100年を超えているこんなぼろホテルで一体何をしようというのか。

2038年5月28日

1927年竣工のホテルダスク。ゴシック風の様式建築で内装も

狂乱の20年代の雰囲気を残している。外観はゴシックだが内装はアールデコといういかにも20年代的な場所だ。現在は何のためか軍が接收しているようだ。そんなこのホテルに多くの軍人が何かの任務のために集まってくる。まあ軍の、特に機密扱いの任務の突飛さには今さら驚かされはしないが。

2038年5月31日

初めて聞かされた時にはさすがに驚いたが、やはり開発が行われていたのだ。タイムマシン。軍の内部でもまことしやかにささやかれていたが、まさかもうテスト段階まで来ていたとは。私はその方面にはあまり明るくないので原理や仕組みはまるでわからないが、私はそのタイムマシンのテストパイロットとしてこのニューヨークに来ていたのだ。テスト？タイムマシンを使って軍は一体何をするつもりでいるのだろうか。その手の知識の無い私を使って？私は人体実験に供されるのか？いや、そうでなくとも、軍は今すぐにでも世界を手に入れようとするかもしれないじゃないか。

2038年6月5日

ホテルダスクの地下に設えられた長い長い通路、その先にその機械はある。機械といっても外見はただのクラシックカーでしかない。多分多くの人間が予想する通りの姿なのだろう。車は100年以上も前のモデルのものだ。この車に例の時間跳躍のための装置が据え付けられているらしい。私はこのクラシックカーを使ってテストを行うことになった。私が被験者第一号でないということを知って多少は安心した。もう何人ものテスト要員が時間跳躍を行っているとのことだ。

2038年6月6日

外見はなんともくたびれた車だが、これがあの時間跳躍を可能にする装置を実装していると知るとどこか空恐ろしさを感じる。

最初の任務を受けた。行先は15年前。そこで当時の自分自身に会い、その自分の私物、できれば手帳や日記を持ち帰る、という他愛のないものだ。そんなことをして一体何になるというのだろう。これで何かのデータがとれるのか。初めてのフライトだからまずは簡単なものからとも聞いたが、私のような素人よりも適任は他にもいるだろうに。そもそも私は15年前に今の自分のような人物に会った覚えはないし日記も失くしたことはない。例によって上官は何も教えてくれない。任務とはいえタイムトラベルをするというのは不安を感じる。

2023年5月11日

初めて時間跳躍というものをしたのだが、特に感じることはない。気分が多少悪くなるくらいだった。

15年前の私の故郷、アナハイム。この車が時間だけでなく場所も移動できるというのは驚いた。相変わらず仕組みは判然としないが。当時私はこの街のハイスクールに通っていた。初めは信じることができなかったが街を見て周ったところ、確かにここは2023年5月11日のアナハイムのようなものである。それとも、私はあのクラシックカーに乗せられて幻を見せられているだけなのか……。

2023年5月12日

私は15年前の私に会ってもいいのだろうか。今頃になってそんな疑問が浮かぶ。そもそも会えるのだろうか。与えられた任務によれば、自分は過去の自分に会えるということになる。とすると、多重世界理論？エヴェレット・ホイラーモデルが正しいというのか？私でもそれくらいは知っている。だがそんなものが既に証明されているとも言えるのか。それともこれから私がそれを証明するということなのだろうか。

2023年5月16日

かつて学校帰りによく立ち寄った書店、そこに当時18歳だった私は、いた。信じられない、驚いた、という思いを抱く以前に会ってしまった以上は受け入れるしかない。なぜならどう疑ってもあれは、紛う方なき自分自身だったのだから。自分で自分を見間違うことなどありようもない。彼は私の記憶通り、古典文学のコーナーに現れた。あのバッグ、あの祖母のお守り房のついた学帽、今でも私は大切に持っている。私はとっさに話しかけていた。

「なにかおもしろいものはあるかい？お勧めの本なんかを教えてください。」

彼は突然声をかけられたのに一瞬当惑した様子だったが、すぐに相好を崩してうれしそうに答えた。

「断然ドストエフスキーですよ。先日カラマーゾフの兄弟を読み終えて、今日は続編を買いに来たんです。」

ああそうだった。私が「カラマーゾフの兄弟」を読んだのは18歳のこの時期だったのだ。そしてこの日に買った続編、「カラマーゾフの子どもたち」は今も愛読している。そうか、この日、ここで買ったものだったのか。

だが私は今日の出来事を覚えていない。忘れてしまってもおかしくはないのだが、日記には書かなかっただろうか。思い出せない。

2023年5月17日

私はもう一度、私に会おうと決めて夕刻にあの書店に行った。だが彼は現れなかった。それはそうだ、きっと学校からすぐに家に帰って「子どもたち」を読み耽っているに違いないのだから。だが考えてみると、仮に私がもう一度、いや二度でもいい、彼と会おうとする。それでも今の私は15年前、書店で三十男と話をしたという“覚え”はないのだろうか。日記にも書かれていないのだろうか。

2023年5月19日

今日あたり、彼は「子どもたち」の第二巻を買いに来るに違いな

い、という予想は当たった。彼は古典コーナーに来るなり待ち構えていた私には目もくれずに、すぐに二巻を手に取ってカウンターに向かおうとした。私は迷わず彼を呼びとめた。

「やあ、この間の、随分お急ぎじゃないか。早いな、もう一巻を読み終えたの？」

私に、こんな記憶はない。

「ああ済みません、気付かなくて、読み終わってはいないですけど、もう一巻はあと少しなんです。」

「そうか。君は……、珍しいんだな、こんな古典を好きこのんで読もうなんて。」

「おもしろいからいいですよ。」

彼は軽く会釈をして踵を返す。私はカウンターに向かう彼の背中に声をかけた。

「ときに、もうじきアリオシヤとコーリヤの対決だったかな？」

「いやだなあ、読んだからってそういうのは無しですよ。」

「ハハハ、済まなかった。」

それでも私は思いだせない。彼はうれしそうに二巻をおし抱いて私の前を立ち去った。それでも私は忘れてしまったのか。日記にも書かなかったのか。

2023年5月20日

私は残りの任務を片付けて帰ることにした。最初は気が進まなかったが私は彼の日記を見てみたい。そして戻ったら妻に当時の日記をニューヨークに送ってもらおう。それにここでぐずぐずしていたら戻ってから上官にないを言われるか知れたものではない。帰還するのはここにいくら滞在しても跳躍直後の同じ場所だが、上はきつとなんらかの形で私の行動をトレースするものと考えておいたほうが無難だ。

留守となっている自宅、やはり鍵はポストの裏蓋のそのまた裏のスペースに隠してあった。学生時代の自室か。もとより確かな記憶

ではないが、思い出せる範囲の記憶通りの部屋だ。日記も決まった場所に置かれている。私はその、まだ半分も書かれていない2023年の私の日記を手に取り、自宅を出た。鍵を元通りに戻し、ちょうど門を出るところで女性と鉢合わせになってしまった。母だった。自宅から見知らぬ男が現れて、驚きを隠せない様子だ。わかるはずもない。たとえ息子の面影があつたとしても、どうしてこの三十男を息子と認識できようか。私は逃げ出した。母は、この五年後に不幸な事故に遭って死んでしまうのだ。やりきれない思いをかみしめながら、私はクラシックカーに乗り込んだ。

2038年6月6日

タイムマシンが時間跳躍を終えてホテルの地下に戻ってみると、そこにはあの時私を見送った上官が、あの時と同じ場所に、同じ姿勢で立っていた。どうやら本当に2038年6月6日、私がこの場所から飛び立った直後に戻ったようだ。本当に？私は長い幻影を見せられていただけなのではないか？だが彼の、2023年の日記は確かにここにある。信じられないことばかりだがその度に見せつけられる現実はいちいちリアルだ。信じざるを得ない。

今日はすぐに休むよう言われたので、私は自宅にある私の2023年の日記をすぐに送ってくれるよう、妻にメールをした。私は日記を失くしたことはないのだ。

……失くしたことはない？しかし今回会ってきた15年前の私は、日記を私に盗まれたじゃないか。“失くした”じゃないか。ではシアトルには2023年の日記は存在しない？もしくは新調された、5月20日以降が書かれた日記が妻から送られてくるのだろうか？全く見当もつかない。

いや、私は15年前の私に会えたのだから、本当に多世界解釈だとするとあの私は私であり私ではない、パラレルワールドに住まう他人ということになる、のか？そう考えると、今シアトルには5月20日以前も書かれた日記が存在しているということになる。だが、

パラレルワールドであるなら当然の話だが、彼は間違いなく私自身だった。

多重世界理論なんて、エヴェレット・ホイラーモデルなんて、あり得ないのだ。あつてはならないものではなかったのか？

2023年の彼の日記には、書店で言葉を交わした私との出来事が、確かに書かれていた。

つづく

第2話

2038年6月7日

上から今回のミッションの報告を求められた。長々と聴取を受けたのだがどうも要領を得ない。上はマシンの運行記録から私の行き先での滞在日数や行動を把握しているようだ。思ったより相当行動を掴まれているという印象を受ける。単なる運行記録では知り得ないことまで上は把握しているようにも思える。私の考え過ぎだろうか。上の意図はマシンの初動試験にあるようだ。だがやることが稚拙にも見える。

今回の目的はマシンの初動試験と君の適性検査にある。

問いただしてみてもそれ以上は全く教えてもらえない。私は思いもよらなかつたが、過去とはいえ自分自身に会うだけで発狂してしまう者もいるとのことだ。

私も軍人だ。上の命令にうるさく口を挟んだりはしない。マシンのポテンシャルは未知の部分が多く、その可能性を探るために多くのデータが必要だそう。そうならそれで頷いておこうじゃないか。

2038年6月8日

タイムトラベル理論と多世界解釈の是非についてはやはり疑問に思う。頭に引つかかる。あの絶対と言われた時間順序保護仮説はどうなったのだろう。シアトルから送られてくる日記を早く見てみたいものだが、私が出てきた15年前の自分は、今の私と全くの同一人物ではない、と考えなければならぬかもしれない。そうでなければあの日記の記録や私自身の記憶など、かみ合わない部分が出てきてしまう。

多世界解釈、この言葉の意味するところは想像するだに恐ろしい。上はもう何らかの確証をつかんでいるに違いない。本当に時間順序保護仮説が否定されているとしたら？

ああ、私はこのことがなにを意味するのか、恐ろしくてすぐには想像できそうにない。

上にはどう当たってみてもなにひとつ教えてはもらえない。テスト要員には何も教えないと示し合わせているようなのだ。私たちテスト要員たちは互いあまり会えないようにされているし、会って話ができてもやはり私と同じ全くの素人で、もちろん込み入ったことは教えられていない。そうなのだ。我々被験者は、実験台は、なにひとつ知らされる必要はない、ということなのだ。

次の任務を受けた。行先は31年前の東京、秋葉原。目的は単純な物品回収。当時のレコーダーとのことだが、その物のスペックや持ち帰る目的についてはやはりなにも知らされない。私はあの国が好きだ。前に行ったのは去年だったか、一年振りということになる。一年振り？ そうだ、今と当時の様子は全くと言っていいほど違うのだ。

いずれ日本の任務もあるだろうと思っていた。昔いたことがあるし日本語だってまだできる。今回も上の意図はまるでつかめないが、個人的には戦前の日本には興味がある。

出発は明日だ。

2007年7月14日

時間も場所も、前回と比べて大きく飛んだようだ。一瞬の出来事の割には奇妙な感覚だ。直前のホテル地下からの出発が、見送る上官の顔がぼやける。昨日の出来事のように感じる。

2000年代の東京。映像や写真などの資料で見たことがあるが、その通りの場所に、いや、その当時そのものに私は降り立ったのだ。正確に調べたところ、ここは2007年7月14日のようだ。このクラシックカーはどこに行っても目立つ。1930年代にでも行かなければ通用しないのになぜこんなものを用意したのだろう。

秋葉原の様子は当然だが去年の、2037年とは全く違う。道行く人々の表情まで違う。

平和。

この一言が私の心に大きくのしかかってくる。当り前の平和、疑われることのない平和、そもそも誰も口にする事のない言葉。

今日、この秋葉原を楽しそうに歩く人々が、そしてこの国の人々が想像もしない悲惨な状況が、2038年のこの国を覆っているのだ。想像などできようもない。

この秋葉原で楽しそうに過ごす人々を見るにつけ、いたたまれない思いがする。

悲哀？

哀愁？

ただ眺めやることしかできない私は一体なんなのだ？

2007年7月17日

それは惨めな物語である。20年後に始まったアジアの戦争は、この国の多くのよいものを奪い去った。今この街に見られる活気も、真面目さも、なにも、2038年にはないのだ。あの戦争は平和なこの国に突如として降りかかった災難だった。避けようとして避けられたものではない、そうだったはずだ。今のこの国の雰囲気、倦んでいる、平和ボケだ、と言う者もいる。だがあの戦争がこの国に強いた状況は今考えても恐ろしい。彼らになにができただろうか。ましてや、この時代の彼らがなにを想像できようか。

今のこの国は平和だ。虚しささえも感じる。あの戦争が始まるのはまだ20年も先の話だ。ではこの国は、今のこの平和をあと20年の間だけでもただ謳歌していればよいというのか。確実に20年後に終わりを告げるこの平和を、ただ座して享けていければよいと、私は言えるのか？

レコーダーを探して街を歩いていたらたまたま起きた交通事故の現場を通りかかった。救急車が来ていたがただの事故ではなかったようだ。けが人が多いのだろう。死者も出たかもしれない。騒然とする現場を目にして、私は連想してしまう。あの戦争の映像を、空

襲で破壊された秋葉原の街を。

私は20年後のあの戦争と、その後の悲惨な状況を知っている。だから考えてしまうのだ。この街の平和が、人々の笑顔が、すべてが、まだ始まってもしない悲劇の1ページに見えてしまうのだ。

2007年7月19日

目的のレコーダーは簡単に見つかった。一般家庭にもあるごく普通の大量モデルのものだ。こんなもの2038年にもありはしなかったか。やはり上の意図はつかめない。このレコーダーに一体何があるというのだろう。当時にしかない技術？未知のスペック？貴重な素材を使っているのか？わかっているのは任務を全くの素人にやらせるという明確な意図だけだ。そしてこのレコーダーもこの街で売られている電化製品のご多分にもれず、中国製だ。こんなどこにもあるものを、しかも中国でつくられたものを、なぜ2007年の秋葉原に私を送り込んでまで手に入れようとする？第一の目的はマシンのテストにあるのかもしれないが、やはりやっていることが稚拙だ。稚拙さを通り越してどこか不気味にすら感じる。

2007年7月20日

目的のものは手に入れたので帰ることにする。単純な物品回収に時間をかけていたのでは上に何を言われるかわかったものではない、というのもあるが、やはりここにいと20年後のことを考えてしまう。私はこの街が好きだ。だから活気に満ちた今のこの街を、人々を、見るに堪えない。

戦争が終わって7年も経つものの、私のいる2038年のこの国の状況はなお酷いものだ。この平和で、穏やかな2007年の様子を見るにつけ、その落差にはほとんど不条理と言っていいくらいの理不尽さを感じる。

だが私には見える。もうこの時点で始まっている。着々と力をつけて無骨な進出を続けるアジアの企業。私はまだそうではないとら

えていたのだが、状況は深刻にも見える。街のどこを探してもにメイドインジャパンの製品は見当たらないのだから。国外でつくられた製品を中国系企業が売り場を日本に移し、それを中国人が団体で買いさらっていく。2038年を一つの結末としてここに来てみると、これはその序章だ。この国の終わりの始まりは、もうこの2007年から嗅ぎとることができる。戦争が終わって7年経ってもなお、この国は立ち直れずにいるのだ。

それでも私はこの秋葉原の街が好きだ。だからまた必ず戻ってくる。そう自分に言い聞かせて、クラシックカーに乗り込んだ。

つづく

第2話（後書き）

もしよければコメントください。お気軽にお願いします。

第3話

2038年6月9日

またあの上官の横に帰ってきた。長く遠い跳躍だったがそれでも彼の様子を見る限り、出発のほんの数秒後に帰還したようだ。相当の精度だと思う。レコーダーはすぐに渡した。何を聞いても無駄なのはわかっていたので訳を聞くのはやめた。私だってプロの軍人だ。上の命令には黙って従いたい。

妻にメールを送ったのは3日前のことになる。だが返信はまだ来ていなかった。

2038年6月10日

突然休暇を言い渡された。日数は二週間。一度家族に会いに行つてやれともいわれた。おかしな話だ。確かに私の任務は日数以上に長いものだったが、現実にはまだこちらに来て一月も経っていないのだ。テストはまだ始まったばかりだ。休みはいらなしわざわざシアトルに戻る気もない。だがそう言ってみても上は全く取り合おうとはしない。二週間の、しかもシアトル帰りをほとんど命令するかのよう言い渡すのだ。

私は追い出されるようにしてホテルダスクを出た。きつとなにかがあったに違いない。マシンに不具合でも起きたのか？もしくはテストの計画に大幅な修正が入ったのかもしれない。いずれにしても、テスト要員をホテルに置いておけないなにかがあったのだ。だが一体なにかあったというのだろう。こんな見え透いたやり方で、上はなにかを慌てて隠そうとしている。なにを？テスト要員には知られてはまずいなにかだ。

上はテスト要員に素人を選び出し、任務に必要なこと以外は一貫してなにも教えない。軍隊ならごく自然なことだが、やはりひた隠しにするなにかがあるのだ。そうに違いない。

妻からの返信は一向に來ないのだが、日記はもう送られていたら行き違いになつてしまふ。私は任務中制限されていた電話を自宅にかけた。

「レイチエルか？私だ。今、いいか？」

「いいわ、どうしたの急に、任務の間は電話できないんじゃないやなかつたの？」

「少し早いが休暇が出た。これからそつちに帰る。」

「そう、なにかあつたの？」

「なにもない。それで、日記の件だけ。」

「ああ、それなら手紙が來たから今日探し始めたわ。一体どうしたの？急に15年前の日記を寄せたなんて。」

「ちよつとあの頃が懐かしくなつてしまつてね。別に大したことじゃないんだ。じゃあまだ送つてないんだね。これから帰るからとりあえず探しておいてくれ。」

「わかつたわ。」

「明後日には帰れる。それじゃあ。」

手紙が來たから探し始めた、とはな。妻にしては妙なことを言う。ずいぶんとのんびりしたものだ。これで家に帰れば日記は見れるか。行き違いではおもしろくなかつた。

さつさと帰ろう。おかしな夢からは一度覚めようじゃないか。

2038年6月12日

シアトルに向かう飛行機の中で今回の二回のタイムトラベルについて、いろいろと考えてみたのだが、こうして家族の元に帰つてみるとあれは全て夢だつたのではないかとも思えてしまふ。あの現実から切り離されたかのように佇む前時代のホテル、こちらの世界では数秒とかがつていないあの過去への旅、過去の世界。

私は正気だろうか。ここには確かに盗んできた15年前の日記がある。そして現在の私の日記はきつとこの家にあるのだ。どこにしまったかは忘れたが探し出すのは明日にしよう。

しかし考えてもわからないことばかりだ。ただあの15年前の私はパラレルワールドに住まう別人だったと思いたい。そうでなければおかしいな。15年前とはいえ日記にも書いたのだから忘れてしまはずがないのだから。

しかし多世界解釈？考えるほどわからなくなってくる。

ああ、そうだ。私は軍人なのだ。被験者なのだ。上の命令には黙って従っていればよい……。そうでありたいのに……。今日はもう寝よう。

2038年6月13日

2023年当時の私の日記はすぐに見つかった。特に隠してなどいないのにレイチェルのやつ、手紙だとかおかしなことを言っていたらかきつけていたな。おかげで行き違いにならずにすんだわけだが彼女らしくもない。

問題の日記には5月20日以前の出来事も書かれていた。思い出せないことも多いがこれは間違いなく私自身の書いた日記だ。そして「子どもたち」を買いに行った記述はあるものの、私の記憶通り、そこで三十男と話したことなど一切書かれていない。似たような箇所もない。私は忘れてしまったわけではない。あの出来事自体が、15年前の私にはなかったのだ。あったのは彼と、三十男の私にだけだった。

あれは別人だったのだ。私であり私でない、パラレルワールドに住まう別人、決定的なのは5月20日以前の内容が重複していることだ。私は日記を二冊書いたりなどはしない。さらに二つの日記をよく照らし合わせてみると、あの書店での出来事その他にもわずかな違いが多々見つかった。たとえば天気が変わっていたり、よく覚えていないが友人と映画を見に行った日などは一週間のずれがある。句読点や書き方など文章の微細な違いはいくらでも見つかる。字は私のものでこのもう一つの日記は彼の記録なのだ。私ではない。安心した。

安心した？15年前の彼が私そのものでないとわかったから？だが考えてみるとどこか気味の悪さを感じる。あのマシンは過去に戻ったと見せかけて実際は別世界へ飛んでいたのだ。いや、ほんの些細な違いしかないのだから過去に戻ったと考えるのはあながち間違っているかもしれない。だがあれは別の私のいる別の世界だったということだ。

多世界解釈とはそもそもなんだったか。

無限の可能性と無限の世界。

どこかでそう聞いたことがある。無限と一口に言われても人間の感覚ですぐにわかるものではない。これは言葉通りに考えていいのだろうか？

無限の世界、無限の可能性、無限冊の日記……、無限人の私……？

2038年6月14日

タイムトラベルや多世界解釈など、SFに詳しい友人がいる。長い休みで家にいてすることがないし、彼と会ってみようと思う。彼と会っても何もわからないかもしれないし知らない方がいいことの方が多いのだろう。私だって上の命令に余計な詮索をしたくはない。だが考えれば考えるほどわからなくなってくるのだ。

つづく

第3話（後書き）

分けずに全部まとめて投稿したほうがいいですかね？
お気軽にコメントくださいませ。

第4話

2038年6月15日

コーデル・リード。彼と会うのも久しぶりだ。ただ会って話をするだけでいいのに、妻に言ったらリード夫人も招いて家で夕食会をする運びになった。妻もそういう面倒が大層お好みなのだから仕方がない。

五年ぶりか。同じシアトルの街に住んでいるからいつでも会えるとお互い考えていたせいも疎遠になっていた。私もそう言われたが、彼も五年前と全く変わっていない。

妻はリード夫人に会いたかったようなので二人には勝手におしゃべりをさせておくとして、私はどこかで読んだSFを急に思い出した、という前置きで今回のタイムトラベルのことをコーデルに話してみた。

「それは多世界もので間違いないね。日記のわずかな違いなんかはよく扱われる題材さ。」

コーデルは珍しくもないといった風に答えた。

「そうか。じゃあ、そういった多世界解釈をベースにしているとタイムトラベラーは自分そのものではなくて平行世界の住人、つまり別人の自分に会うことになるんだな？正確に自分そのものに会うことはできるのかい？」

「できない。会えたら多世界ものとは違ったジャンルになってくる。そういうのだと大抵は自分に会ったら大変なことになる、とか言うんだがね。」

「仮に五分前に戻ったとしても会えるのは別の自分？」

「別だね。一秒だって別さ。タイムトラベルをすると必ず別の世界に行き着く。だから元の世界そのものの過去、未来に行くことはできない。これが多世界解釈だ。ただ別と言っても元の世界との差を極小に抑えて跳躍するはずだから、別世界でも過去や未来に跳んだ

と考えるもいいわけなんだよ。もちろんパラレルワールドだから元々いた世界とはなにも関係はないんだけどな。」

「そう……、いうことになるのか。」

コーデルのSF好きは異常だが本物だ。今回の任務についてもなにか説明がつきそうな気がしてきた。

「急にどうしたんだ？SFは読まないんじゃないか？」

怪訝そうにこちらを見てコーデルが言った。わたしは「オレも読書の幅が広がったのさ。」と適当に流した。

「多世界ものだと過去に戻っても元の世界とは無関係だから、よくある未来を変えるとか、過去を修正して現在を変える、とかができないんだよね。だから大抵主人公は過去に行かされてもものを回収してくるくらいしかないわけ。戦争で失われたテクノロジーを過去に戻って回収してくる、とかはよくある話さ。展開が限られてくるんだよ、多世界ものは。それでもうまい作品はいくつかあったが……。」

私は思考を整理するのに必死だったが、コーデルは私がSFに興味を持ったと思っとうれしそうに語り続ける。

「ところで、多世界ものじゃないSFで、過去の自分に会ってはいけない、と言っるのはなぜ？やっぱりそれが正真正銘の自分そのものだから？」

私は彼のうんちくを強引に遮って質問した。だがそれにもかかわらずコーデルは嫌そうな顔もせずに応えた。

「なあ、これはよくあるべたな話じゃないか。過去の自分自身に会ってしまったらなにかまずいことになるに違いない。そう考えるのが自然な感覚さ。そういう一般的で、直感的な普通の感覚に合わせた話を作れば理解しやすいしうけもいい。そうだろ？」

「そんなことはオレにもわかるさ。だが実際にはなぜなんだ？」

「矛盾するからさ。君の言うとおり、正真正銘の自分そのものだからだよ。ちよっと考えてみればわかる。仮に五分前の自分に会おうと思っ立ったとする。それでタイムマシンに乗って五分前に行こう

とするのだが、本当に会うつもりならその時点で五分前に自分と会った、という記憶がなければおかしい。もしくは自分は一人だけでそもそも過去の自分はいないか、だ。よく言う親殺しのパラドックスをもつと簡単にした話さ。」

「そう考えるとそもそも過去に戻る、ということ自体が不可能になる結論だな。聞いたことがある。」

「そうだな。この矛盾を突き詰めていくと、最後に時間順序保護仮説に辿り着くんだと思う。本当は小難しい物理の話があるらしいがね。そもそも過去を変える、過去に影響を及ぼすような行動は一切とることができない。よって過去へのタイムトラベルは不可能。はい終わり。となってしまう。タイムマシンをつくらうとする行為自体が因果律に反する、矛盾する、という話さ。これじゃあおもしろくもない。」

それでももうまい話はいくつも見たことがあるぜ、とコーデルはまたひとりで語り出す。

「なら多世界解釈についてももう少し聞きたい。」

「いいぜ。」

コーデルは私が急にSFに飛びついてきたのを見ていかにもうれしそうだ。

「以前どこかで、無限の可能性と無限の世界、という記述を読んだ覚えがあるんだが。」

「ずいぶんとうまく片付けたものだが、そう考えても間違いではないと思うな。」

「それは言葉通りに考えてもいいのか？本当に限りが無い、ただたぐさんあるというくらいでいい方でもない、“無限”であるか？」

「そうなんだろうな。無限なんて言われてもピンとこないけどな。つまりはあらゆる可能性、あらゆる結果のバージョンが平行、多重に存在している、というのが多世界解釈なんだ。だからやっぱり、無限なんだと思う。」

無限、か。言葉は簡単だがその概念はとらえがたい。現実離れし

ていると言ってもいい。

「そうか。君はさつき、過去に戻っても元の世界とは無関係だと言った。似ているだけの別世界だと。本当にそれは別世界なんだな？自分に会ってもそれは別人、よく言う親殺しのパラドックスは起きない、ということなんだな？」

「起きない。やろうとすれば自分を殺すことだってできる。多世界解釈ではあらゆる可能性が存在する。親や自分を殺したところでそれも単なる可能性の一バージョンでしかないんだ。自分の元々いた世界にも、自分にももちろん影響はない。独立した別の世界、別の可能性の出来事ではないということさ。」

「わかりにくいな。なら今ここでこうして君と話をしている自分というのも、無限の可能性の単なる一バージョンであるということなんだよな。そうでないあらゆる可能性、無限通りの世界が平行して折り重なって目に見えず存在している？」

「その通り。人間には別の世界が絶対に見えないからそうやって言うんだ。しかしそう言われてもああそうか、とすぐにわかる人はあまりいないと思う。むしろ分岐だよ。そう考えるとわかりやすい。

仮に君が親を殺したとする。すると死んだ時点で親が死んでいる世界Aと親が生きている世界Bに分岐するのさ。その裏にはまた無限のバージョンとそれに基づいた無限の結末があるんだろうが、観測者である我々個々人から見れば、やはり死んでいるか生きているかの分岐にしか見えない。個々のレベルで見ればそうとらえても問題はないんだ。」

「だけどその分岐だったの二つだけではないと思うが、殺し方一つをとってもパターンはいくらでもあるぞ。」

「だから無限の可能性だと言っているじゃないか。人間には未来は見えないんだ。一つの過程と一つの結果しか観測できない。だから多世界なんていう解釈もできるんだ。それを無理矢理シンプルに考えたと分岐に見えなくもない、とわかりやすく説明したつもりだったんだけどな。無限の可能性と無限の世界なんて人間が見ることは

できないんだ。相反する結果を同時に観測することができないから分岐と言った。だが実際には相反していようとすべての結果が、その可能性とともにあまねく存在しているのさ。」

人間には未来は見えない、か……。そういえばあのマシンは未来へは行けるのだろうか。

「では仮に、今オレが15年前にタイムトラベルしたとする……。」

「ああ、そうしたらまずこう考えなきゃならないな。行き先の15年前の世界はタイムトラベラーの君のいる世界Aとない世界Bに、君が到着した時点で分岐する、とね。」

「結果はそれだけか？もちろんそのAとBの世界も無限の可能性の一つに過ぎないのだろうか。」

「一つ確認しておくが、AもBも元の君の世界とは別物だというのはいいよな？元の世界との時系列的な直接の因果のつながりはないというのは忘れてはいないな？」

「ああ忘れてない。それが多世界解釈の基礎なんだろう。」

「うむ。結果はわからない。ただ無関係なその行き先の世界が分岐したというだけの話だ。君のせいだというわけでもない。主観的に考えればタイムトラベラーのせいにも見えるが実際には無限にあるパターンの一つに過ぎないんだ。だがそのもたらす結果は予想なんてできやしない。未来が予測できないのと同じさ。」

「しかし、タイムトラベラーが現れた世界はそのイレギュラーな存在のせいで分岐して、その影響で本来とは違った結果を迎えることになりはしないか？」

「確かにタイムトラベラーの来なかった世界とは違った様相を呈するのだろうか、君の言うイレギュラーな存在のせいで、という考え方は間違いだ。」

「どうして？仮に15年前に現れたオレがそこで、何でもいい、ものを盗んだりしたら、それはその世界の本来の因果律に反しているとは思わないか？あるいはオレのせいでその世界はそれまでの因果からまるきりかけ離れた変貌を遂げてもおかしくないじゃないか。」

そうだ、15年前の彼は本来なら日記をなくしたりはしないはずだった。それを本来は存在しないはずの者によって奪われたのだ。不条理だと言っている。

「モデルはそれでも自信に満ちた様子で答えた。

「多世界ものに登場するタイムトラベラーは得てしてそう考えるものさ。だがな、そういう考え方は実際には間違いだ。そもそも本来の因果律とはなんだ？その世界の本来のあるべき姿とは何なんだ？そんなものは未来が予定されてでもない限りありはしないんだよ。無限の可能性と言ったはずだぞ。だからタイムトラベラーの存在はイレギュラーでもなんでもない。タイムトラベラー自身からみれば自分が世界を変えてしまったようにも見えるが、現実にはそれもまたその世界の無限のバージョンの一つでしかない。タイムトラベラーが来なければこうだった、と予想することはできてもそれが予定されているわけではないんだ。」

わかりにくい。話全体が不明瞭だがこれも無限の可能性という言葉のつかみにくさに起因しているのだろう。考えるほどに現実離れた言葉だと思う。およそ人間の感覚で理解できるような言葉とも思えない。

あの15年前の彼はなんだったのだろう。無限の可能性という大海の、ほんのひと掬いの世界、そこに住まう別の自分……。

「じゃあ突然タイムトラベラーが現れて何かをしていく、という筋書きもまた本来の因果の内だと？予定され得ること、ということが？」

「本来の、とか予定とかいう考え方が適当じゃない。未来はあらゆる可能性によってあらゆるバージョンを経て、あらゆる結果を迎え得るからだ。タイムトラベラーがその世界を変えてしまったと言っのなら、同様にその世界に住む我々にだって変えることができると言える。全ての未来は間に何が入ろうともあらゆる可能性によって予測不能に形づくられるのさ。多世界解釈に予定や因果という言葉はなじまないんだ。」

「だいぶ哲学的になってきたな。話は何となくわかったが、どうも要点はつかめそうにないよ。無限の可能性という言葉が全てをわかりにくくしている、というのわかる。」

「だけどその言葉が出発点じゃないか。あーあ、オレもわからなくなってきたよ。しかし因果律だの予定だのといった運命論的なものを徹底的に排除したらこうもなるんじゃないのか。世界を変えるのはタイムトラベラーだけではない。その世界の人間がやろうとすればいつでも変えることができる、というくだけは好きだよ。どこかで読んだんだが。」

コーデルの言いたいことはわかる。多世界云々の話を抜きにしても、未来は無限の可能性によって形づくられる。この考え方はごく自然だ。コーデルは続けた。

「……でも重要なのは理論や解釈じゃないと、やっぱり思うわけよ。そういうガチガチなのを読みたければ本物のハードSFを読めばいい。ずいぶん昔に廃れちまったジャンルだけだな。」

大切なのは人間ドラマ、そうは思わないか？」

「……ならば、多世界解釈の方が自然だと考えていいな？」

彼は私の唐突な切り返しに面食らった様子を見せた。

「そ　そりゃ、タイムトラベルなんていう自然じゃないことを自然に考えようとしたら、多世界解釈なんていうおよそ自然とはかけ離れた理論を持ち出すしかない、という話だろ。なあ、今日は一体どうしたんだ？」

「なんだ、君が話したそうにしてたんじゃないか。」

「おいおい、茶化すなよ。いずれにせよ、タイムトラベル理論は今となってはSF創作上の小説技法の理論でしかないんだ。机上の空論だと言っている。それもハードSFでもなければ小説の主役になるべきテーマじゃない。裏方の舞台装置にとどまるべきものなんだよ。」

机上の空論か、きっとそうであるからこそ小説に扱われるのだ。実現してしまっただけにはそこにはドラマの何も無いに違いない。

「わかった。それじゃあ、君は過去へのタイムトラベルを信じないんだな。」

「コーデルは私の問い詰めるような物言いに気圧されたようだった。それは……、現実には信じないね。それにそんなある、ないの議論を今さら小説でやってほしくはないし……。」

「……。」

コーデルがゴクリとワインを飲む音が聞こえる。前に座る妻とリード夫人も私たちのただならぬ雰囲気気づいたようだ。心配そうにこちらをちらちら見ている。

それでも私は、

「なぜ信じない？」

ときいていた。

「それは……、なあ、だってこれは信じる、信じないの問題じゃないじゃないか。そうだろ？オレたちSFの話をしてるんじゃないのだったのか？」

こう言われてしまうとこちらも言い返せない。

「まあ、そうだSF小説の話だ。」

仕方がないのだ。彼ほどSFが好きであつてもまともな人間ならタイムマシンなど信じる信じない以前の問題だ。SFであるのなら机上の空論、であるべきなのか。

「タイムトラベルものはもうずいぶん昔に確立されたジャンルだ。理論や解釈は偉大な先駆者たちによつてもう出尽くしたと言つてもいい。それでもタイムトラベルもののSFが今も読まれるのはなぜだと思つ？」

それはな、それが人間ドラマだからだよ。今さら理論や解釈をこてごて並べ立てても喜ぶのはマニアだけだ。タイムトラベルというコアなSFの下敷きを使おうとも作者が描くのは飽くまで人間の苦悩や葛藤なんだ。だから多くの人が読んで共感し、感動もする話ができる。それが小説を離れてマシンを現実につくろうだなんて普通じゃない。可能不可能以前の問題だ。現実にはドラマなんてありはし

ないんだろつよ。きつとつくつてからなかった方がよかつたと思うよ
よくあるオチになるパターンさ。」

それは確かにもつともらしい。だがSFマニアのコーデルにしては現実的な返しだ。彼らしくもない。

「どうしてそう頑ななんだ？ 実際に関発の話は聞くじゃないか。確かに普通は信じたりしないだろうが。」

「……君もずいぶんこだわるんだな。」

コーデルは少し考える風に、下を向いて答えた。グラスを手にとつてまたワインをやりだす。

「なあ、もうこの話はやめにしよう。オレはもうなんだか胃が痛くなつてきたよ。」

彼はチツと舌打ちをしてグラスをガタリと置いた。もうある程度酒が回つてきているようだ。

ふむ、あまり焦つて彼から聞き出そうとするあまり、普通の夕食会でするようなまともな話題とは言えない、それこそ議論のようなものになつてしまった。コーデルは辟易した様子で前に座るレイチェルと話し出している。

しかし確かに夕食にしては重い議論をふっかけた私にも問題があったが、コーデルはどうしてああも唐突に話をやめたがったのだろう。酒がまわつただけか……。

「ごめんなさいね。もうお酒が効いてきてしまったみたい。こうなつてしまつと5秒前のことも覚えてられないみたいで……。」

不意に正面に座つていたリード夫人が言った。

いけない、この人のことをすっかり忘れていた。私は最前までの話の内容を反芻するのに集中していたので驚いてしまった。

「そ、それは仕方ないですね。ただ、少ししか飲んでいませんよ、彼。」

夫人は訳知り顔で頷いている。

「話、聞いていたんですね。」私は尋ねた。

「タイムマシンがどうか、未来の可能性がどうか？」

「ははは、聞いてらしたんですね。いや、おいしくもない話を失礼。」

「いいえ、おもしろそうじゃないですか。無限の可能性と無限の世界、でしたよね。私も主人の本をいくつか読んだことがあるんですよ。」

「なんだ、奥さんもお詳しいんですね。」

「まさか。でも多世界解釈の話でしたね。それならいくつかおもしろい話を読んだことがあって。」

「それは、どんな話でした？お聞かせ願いたいですが。」

私はそれからリード夫人とSFの話をしたのだが、どうも彼女は夫とは別のジャンルのSFが好みようで、SFをあまり読まない私は相手を務めるだけで精一杯だった。よくもまあ夫婦そろって奇異な趣味を持ったものだ。

「でも無限の可能性と無限の世界、と簡単に言うようですよけれど、でもこうは思いません？もし現実が本当に無限にあるのなら、もうそれ以上の現実はない、という状況を引き起こす現実が必然的に生じる、なんて。」

話の流れから彼女はこんなことを言ったのだが、私は言葉の意味がすぐにはわからなかった。それ以上の現実はない、という状況を引き起こす現実？現実が無限にあるのならそういう現実もまた存在すると？

だがよく考えてみると、……そうだ。無限の可能性というところえがたい言葉の矛盾を、うまく言い得てはいないか？無限に終わりがあるのか？

「と、いうのを以前読みましたの。」

「そ、それはどこで？」

「タイターですよ。ご存じですよ。もうずいぶん昔の話ですけど、ネット上で彼に対してこういった指摘があったようなんです。」

ジョン・タイター、私もどこかで名前を聞いたことがある。確か彼は2036年からのタイムトラベラーだった。だが本当に昔の話

だ。彼が現れたのはもう30年以上も昔のはずだし、2036年だつてもう過去の話だ。よくは知らないがペテンだと叩かれた彼の理論も多世界解釈に基づいていたはずだ。ただ彼の予言はことごとく外れ、タイムトラベル自体が不可能と言われた今となってはどこにも彼のことを信じるものなどいない。

そんなものを今さら持ち出すとは彼女もお里が知れるが、私は現実を見てしまっている。この30年前のネットでの洞察はとても微妙なポイントを見事に突いている。

「それは……、詭弁ではありませんか？無限の可能性という言葉自体が矛盾している？」

「そうなりますわね。」

夫人はさらつと答えた。

「では多世界解釈は、無限ではないと？これもどこかで矛盾しているのと言うのですか？」

「そんなことはわかりませんわ。タイターはこの指摘に応えずに姿を消してしまつたんですもの。ただ、無限の可能性、の一語で全てを片付けようとすると思わぬ罠に落ちるのでは、と私は思いますの。」

最早ここまでくると言葉遊びの感も否めない。だがこれは見事な指摘だ。センスさえ感じる。

「これは……、言葉遊びですね？」

「そうかしら。そうおとらえなら結構ですけれど。」

「……では聞かせていただきます。その、それ以上の現実はないという現実を引き起こす現実、というのはどういうものなんでしょう。どのようにお考えなのですか？」

「それはわかりませんわ。ただ無限の可能性という言葉に対してこういう考え方もある、ということではなくて？あなたはどう思われますの？」

「それは……。」

私は返答に窮した。それは、無限ではないということ、有限？

いや、難しく考えることはない。

「それは、どこにでもあるのではないですか？例えば今、私が右手にナイフをとろうと、グラスをとろうと、その選択はどちらも十分あり得る、自然なものです。しかしその手にとったナイフを、突然自分の喉元に突き立てる、というのはどうです？これはあり得ない選択です。無限の可能性というからにはその可能性もゼロではないかもしれません。しかしそのあり得ないこと、限りなくゼロに近い可能性、それが無限の終わりではないかと、今思いました。だからそれはどこにでも、いくらでもあるのではないかと。」

夫人は驚いた様子で目を丸くしている。思いつきで言ったのだ。お話にならない幼稚な洞察、そう思われても仕方がない。

「それこそ詭弁ではありませんの？でもおもしろいことをお考えになりますのね。私はそんなこと全く思いつきもしませんでした。けれどもそれは、無限とは言わないのではないですか？それにもうひとつ言わせていただきますと、やはりあなたが喉にナイフを突き立てる可能性はゼロではない、どんなにあり得なくても、それでも存在するんですわ。あなたが今、この瞬間にもナイフで自害する世界というのは。それが多世界解釈なんですもの。」

「じゃあやつぱり矛盾してるんじゃないですか。」

「ええ、矛盾してますわよ。」

またしても夫人はさらっと応えた。

「ゆ、誘導しましたね？」

「あら失礼。でもあなたがおっしゃることももつともだと思えます。私なんか本当のそういう現実が存在するのだと思ってましたもの。」

「と、おっしゃいますと？」

夫人は少し間を置いて答えた。

「もうそれ以上の現実はないという状況を引き起こす現実、そのものがぼつんとひとつだけ、可能性の海のどこかにあるのではないかと。」

「そんなものが……？」

「それは、全ての可能性が死んだ世界。全てはあらかじめ決められた一本のシナリオによって淀みなく進行する。黄金律の世界。」

「それは、……あの世、ですか？」

「あるいは、天国かも。」

黄金律の世界、無限の世界のどこかにそういう現実があると仮定してみる。だがこれも無限の可能性という言葉には反する、そうではないだろうか。そう言う者もいるかもしれないじゃないか。

無限の可能性という言葉自体が矛盾を内包している。それがこの掴めない言葉の罫、なのか？わからなくなる。

「地獄って言うんだよ。そういうのは。」

いつの間にか聞いていたらしいコーデルが言った。さっきよりも酔いがひどくなっているのがはた目にもわかる。

「君ももうやめておけよ。こんなのと言葉遊びだなんて、バカをみるだけだぜ？大概にしておけよな。」

コーデルは自分の妻を指さして言う。どうも呂律もあやしくなってきた。

「ああ、わかった、わかったよ。」

私は彼の背中をさする。

言葉遊び、か……。それもそうだ。タイムトラベルなんてまともな感覚を持っていればSF好きであっても信じたりはしないのだ。それが普通だ。現実を見せられるまでは……。

コーデルの様子もあるし、夕食会ももうすぐお開きだろう。だが私は聞いてみる。

「では最後に、奥さん、あなたはタイムトラベルを信じますか？」

「信じますわ。」

「な……に？」

またしてもさらりと答えられた。

「無限の可能性、多世界解釈を信じるのなら、可能性は無限なのだからタイムマシンも信じざるを得ないのではありませんこと？」

「いやでも奥さん、そもそもタイムマシンが可能であるのなら、多

世界解釈で説明するしかない。さっきコーデルがそういう風に言った。だから、それは、……逆じゃないですか。信じる順序が。」

「ええ。おっしゃる通りですわ。」

夫人は楽しそうにそう言った。目がいたずらっぽく笑っている。

「そういうこと……、なんですか。」

「ええ、そういうこと。」

「……わかりました。」

夕食会はこれでお開きになった。コーデルはひどい有様だったが、またこの話題について話を聞きたいという私の申し出には二人とも快諾してくれた。

思考実験、言葉遊び、机上の空論、常識ではこう言つのだろう。紛れもない非現実だからこそ思考と言葉だけの“実験”、“遊び”として成立する。だが私にとってこれは現実だ。実験でも遊びでも済まされはしないのだ。

つづく

第5話

2038年6月16日

細かい部分は曖昧なままだが自分のやらされていることについて概ね、頭の中でまとまりはついた気がする。だが同時にこつも思う。なにも知らない方が利口なのだろうと……。軍が求めているのは言いなりの駒だ。

無限の可能性……、か。そんなものに手を出して軍はなにをしようとしているのだろう。だがな、前世紀の発明を見ても軍のやろうとしていることは底が見えるじゃないか。宇宙ロケットに話は似ているのだ。本当の目的は表向きの名分にきれいに隠蔽される。

休暇ばかりもらってもやることなどない。

手持ち無沙汰で家の掃除などを始めた。すると、なんとなくものの整理をしているうちにくずかごに軍の封書が捨てられているのを見つけた。私は不審に思って妻にきいてみた。

「なあレイチエル、軍から手紙が来ていたのかい？捨ててあるみたいだが、僕宛ではなかったのだね？」

くずかごから封書を拾い上げてみると、宛名は妻のものになっている。軍から妻に手紙が来るとは珍しいがそのまま捨てるということも不用心だ。中身は入っていないが。

「ああ、それは私宛よ。中身は捨てたりしないから大丈夫。」

「ふうん。軍から君に、ね。もしよければ、どんなものだったか内容を教えてくれないか。」

私は何気なくきいてみた。

「減給の知らせなんか、本人より先に妻に行ったりするからね。油断ならないのさ。」

減給かどうかは別として、実際に本人に知らせずに家族に先に知らせが行く、ということはよくある。たとえば危険な任地に着任する前など、家族だけに先に通達が行くということがあるからそうい

ったもので先が読めたりするのだ。ひどいのは未来の死亡通知のよ
うなものもあるという話だ。

だが妻は家事の手を止めて驚いた顔でこちらを見ている。

「どうした？悪い知らせなのか？」

「い、いいえ。だって、それはあなたが書いた手紙でしょう？軍か
らのではないわ。」

「な……、に？」

なにを言っている？私が書いた手紙？妻宛に？いつの話だろう。
手紙などこのところ書いた覚えはないが。

「覚えてないの？」

妻が怪訝そうな顔をしてきいてきた。

「ああ、覚えてないな。いつ届いた？」

「6日ほど前よ。」

私は封書の消印を見てみたが、それは6月9日となっていた。二
ユーヨークから送られたことになっている。

「中身は？手紙は捨てていないんだっただな？」

「す、捨ててないわ。15年前の日記のことよ。帰る前にあなた自
分で電話で言っていたじゃないの？」

ああ、確かに帰る前に日記のことで電話はした。

「今すぐその手紙を出すんだ。」

妻は心配そうにこちらを見て言った。

「ねえあなた……、どうかしたんじゃない？」

「いいから早く出すんだ！」

私は有無を言わず命令した。妻はおびえるように部屋を出て行
った。

15年前の日記のことについて妻に宛てた手紙、手紙だと？私は
メールを送ったのだ。なのに妻は手紙を受け取ったというのか？確
かニューヨークから電話をかけたとき、妻は手紙という言葉を口に
した。その時は気にもかけなかったが……。私は手紙など書いても
いないというのにその手紙は一体どこから出てきたのだろう。メー

ルは届いていないのだろうか。そもそもメールは存在しているのか？
空になった封書をもう一度見てみる。ここの住所と妻の名前が書いてあるのだが、それが私の字に見える。だが私はこれを書いた覚えはないのだ。

「いやあ、妻が折りたたまれた一枚の便箋を持って戻ってきた。

「ああ、ありがとう。それが、つまり、僕が君に宛てた手紙なんかな？」

「ええそうよ。自分で書いた手紙でしょう？15年前の日記を送ってくれて。それを覚えてないってことなの？」

「ああ、僕はその内容をメールで送った気がするんだが……。いやでも、僕も慌てていたから手紙を送っておいてメールを送ったと勘違いしていただけなのかもな。驚かせて済まなかった。」

言いながら私は彼女の手から手紙をひったくった。彼女がますます怪訝そうな顔をしてこちらを見ているのがわかる。手紙はやはり私の字で書かれていた。

- 妻への手紙 -

レイチエルへ

まだこちらに来てから二週間ほどしかたっていないが、そちらは問題なく過ごしていることと思う。こちらもいつもと同じだ。心配はいらない。

突然だがひとつ頼みがある。この手紙を書いたのもそのためだ。

私の部屋の書棚の奥に昔の日記がしまい込まれているのだが、そこから15年前のもの（2023年のものだ）を見つけ出して送って欲しいのだ。受け取りのアドレスは別に記しておく。

変なことを頼んで済まないがそれが今すぐ必要だ。引き受けて欲しい。

6月8日

要件のみ、取り急ぎ

なんだこれは。

私はこれを書いた覚えはない。こういう手紙を書くことはあるが、それに日記がすぐに必要ならどうしてメールを使わずに手紙を送った？

私は思い違いなどしていないはずだ。この手紙は私の字で書かれてはいるが私が書いたものではない。間違いなくメールを送った記憶があるのだ。

これはなんの冗談だ？これを書いたのは私ではない、別の自分だ。別の、自分？

ぞわりと背中にいやな感覚がはしった。

本当にこの手紙を私でない別の自分が書いたのだとしたら？しかしそうするとこれを実際に書いた別の自分とは一体何者になるのだろうか。

「なあレイチエル、僕は君にこの内容のメールを送った気になっていたんだが、来ていないんだな？メールは。」

「来てないわ。」

「一度も？」

「あなたがニューヨークに行つてからはないわ。ねえなにかあったの？あったのなら説明してくれない？」

やはりこう考えるしかないようだ。

6月9日にこの手紙を書いて自宅に送った私がいる。それは他人のいたずらでも私の記憶ちがいででもない。字が間違いなく自分のものだし内容も私しか書きよつものないものだからだ。つまり15年前の自分自身と会ってきたように自分でない自分が、どこから現れたのかわからないがこれを書いたのだ。

どこから現れたのだろうか。

確かコーデルはこう言っていた。タイムトラベルをすると必ず別の世界に行き着くと。もとの世界そのものの過去、未来に行くことはできないとも。私はこれを聞いて15年前の自分自身に会つてき

たことについて納得してただけで、もうひとつ重大な意味があることに気づかないでいたようだ。

これは‘行き’のことだけを言っているのではない。きっと‘帰り’のことも言っている。

……私は帰れていなかったということか。コーデルの言っていたことは行きだけの話ではない。そんな都合のいい話ではないのだ。なぜなら私はこうして帰ったと思っている今ここで、別の自分の存在を見せられてしまったのだから。

タイムマシンを使ってしまった以上はもう二度ともこの世界には戻れない。それでも戻れたように見えるのは別の世界とはいえその差違を極小に抑えて跳躍するからだ。彼は確かこういうことも言っていた。

「どうも思い違いをしていたようだ。」

私はそれだけ言って書斎に引っ込んだ。

この手紙がなにを意味しているのか、落ち着いて整理してみる。私はこれまでの2回のタイムトラベルで別の世界の過去とはいえほとんど全く違いのない世界に跳躍した、はずだ。そして2回とも差違を最小に抑えて帰ってきた。だから過去の世界にタイムトラベルし、元の場所に‘帰ってきた’ように見えた。

今回も差違を極小に抑えて帰りの跳躍をしたはずだ。しかし私が今帰ったと思っているこの世界では、6月9日に私はメールではなく手紙を送っていた。そういう行動をとった別の自分がある世界に私は‘帰った’のだ。

この手紙を送った別の私は今どこにいるのだろう。今の私のように少しずれた世界に‘帰った’のだろうか。

軍はこの別世界に跳ぶというタイムマシンの性質を知っているはずだ。私も今になって思い知らされたが、別の世界に跳ぶというのは帰りにも言えるのだからこれでは一度見送ったテスト要員は二度と戻らない計算になってしまう。軍はそれを知っているはずなのだ。知っていながらテスト要員が任務を終えて帰還することを前提とし

た実験をするというのはどういうことだろう。

きつともとのテスト要員がそのまま帰ってくるなどをはじめから想定していないのだろう。だがなにかしら別のテスト要員が帰還するのだ。私も手紙とメールという明らかな違いのある別世界とはいえ‘帰った’ことになった。上は別のテスト要員が帰還したとわかってはいるがなにも問題は無い。しっかりと成果も回収している。似たようなものなのだ。

私はなにもすることのない自室でひとり悶々と考える。レイチエルは相当気になっただろうがここまで来ることはない。ありがたいことにあまりうるさい性質ではないのだ。

外は雨が降り出したようだ。

6月の雨か……。少しテラスに出てみよう。

遠方には連なる山々が見えるが雨のおかげで白く霞んでいる。

この雨は、私の元々いた世界では降っているのだろうか。あの山々も、ここから見えるシアトル市街の風景も、私がタイムトラベルをする前とはどこかずれているのだろうか。そして今ごろキッチンで夕食の支度をしているレイチエルも？考えたくもない。

無限の現実があり無限の可能性があるのだからタイムトラベル実験をしている私も無限人いる。同じ任務を与えられて同じ行動をとり同じように帰還しようとする私も、たとえ差が極小でもちよつとした条件やパターンの違いから無限に存在する。だから結局はテスト要員は帰ってくる。そういう計算をしていいのだ。

ああなんとという恐ろしい計算だろう。それはさながら無限個ある駒だ。使う側は駒が無限に用意されているのだからなにかを心配する必要もない。送り出された無数の駒がたとえ失敗しても、いや、帰ってこなくてもいい。いくらでもある無価値な駒を使い続けていればどこかで成果は得られる。そして駒は簡単には減らない。別の世界に帰ってしまう駒がいても私のようにその代わりに別の駒がさも自然そうに帰ってくるのだから。

駒というのは本来は数に限りがあるものだ。だから使い惜しみも

するしよくよく運用のしかたに気をつけて無駄にするまいと思案する。だが無限個あつたらそれは駒とも呼ばないのではないか。駒以下だ。無限にある塵をいつせいにふるいにかけてその中から使いものになる成果だけを掬い取る。掬われずに下に落ちた塵はまた吹き散らされるが今度はなにか成果を持ち帰るかもしれない。軍はこうしてこれまで何人も二度と戻れぬ別世界に送り出してきたのだ。だがそれでも被験者は帰ってくる。被験者は帰ったと錯覚するのだ……。

2038年6月18日

軍から手紙が来た。今度は自分宛のものでニューヨークからだ。新しい任務か。

だが手紙ということとは急ぎではない。逆に気になる部分もあるが、休暇を言い渡しておきながら戻つてすぐの私に手紙とはおかしなことをする。毎度のように噛み合わせぬことをする組織ではあるが。私はすぐに軍の封書を開いた。用紙も軍の便箋が使われている。

気をつける

なん……、だ？

よく見てみる。

A5版の軍用便箋の端にただ気をつける、とだけ書いてある。これはなんだ。軍が書いたものではないな。いたずらか？

そうだいたずらに違いない。こういうことをしそうな者は心当たりがある。すぐに私は手紙をくず入れに放った。

……気をつける？一体なにに？

気になる。いや、だが他愛のないジョークだこれは。書いたのは前の所属の同僚に違いないさ。だが……。

まだ、なにかが書いてある？

くず入れからのぞく丸められた便箋にふと目を落とすと裏面が、まだなにかが書いてあるのが見える。私は慌てて便箋をくず入れから拾い上げた。裏面だ。まだなにかが書いてある。

とあるタイムトラベラーより

はっとして私はすぐに便箋をくず入れから拾い上げた。

とあるタイムトラベラー、だと？

これは……、いたずらではない。断じて違う。普通ならこの差出人を見ればいたずらだと確信するのだろうが。

ああ、だがこれはそうではない……。他愛のないいたずらだとできることなら思いたい。だがそうではない。そうではないとこれまでの全ての状況が物語っているのだ……。

文面は印字で手書きではない。しかし一体誰がこんな手紙を？ たったこれだけの手紙でなにを伝えようとしているのだろう。ひとつだけ確かなことは、私が極秘のタイムトラベル実験に携わっていることを知っている人間がこれを書いたと言うことだ。偶然事情を知らぬ者がこんな酔狂ないたずらを仕掛けてきたなどとは考えようもないはずだ。

誰だ？

私に危険を知らせている？

あれこれ考えていると電話が鳴り出した。出てみるとニューヨークからだった。

話はすぐに終わった。休暇を切り上げてすぐに戻るようにとのことだ。実験再開だと言っている。

一体なにがどうなっているんだ？ 上が私の目の届かないところでいや、目に見えないようになにかを探っているのはわかりきっているが、この際それはもういい。私はきつといかにも扱い易い良い駒なのだろう。だがこつも考えられる。上もおそらく暗中模索なのだと。

あの手紙が一体何なのか気になるところだが、言われたとおりにすぐニューヨークに戻る。

とあるタイムトラベラーからの手紙か。案外ウソではないかもしれない。私が無限人いるのと同じでとあるタイムトラベラーなどという者も無限人いるはずなのだから。

しかしあの妻への手紙を書き送った別の私といい、おかしなことが多すぎる。不可解だ。軍は自らが開発したタイムトラベル理論をなんとかしてものにしようとしている。上は上で解明したいことがあるのだろうが、私もこここのところの状況から単なる被験者ではいられなくなってきた。実際に私は多世界の海を渡ってしまったているのだ。もとの世界にはもう戻れはしない。コーデルの語った多世界解釈が正しいのなら、私はもう戻る場所などないのだ。引き返すことはできない。

“気をつけ”の方がいいのだろう。

だが、私は自分の身に起きていることを知りたい。上には上の意図があるのだろう。秘密主義でも構わないさ。だが私は私でなにかを探り出してくれる。

だがそれはなんだというのだろう。

私自身の運命、か？

あの前時代のホテルは異世界への入り口だ。一度足を踏み入れてしまったが最後、もう戻ることはできない。待ち受けているのは仮借のない、剥き出しの運命だ。そこでは全ての現実が情け容赦なく襲いかかる。

戻れと言っのならすぐに戻る。次の任務でもなにかが起きるのだろう。きつと気持ちのいいものではないに違いない。

私は踏み越えてはいけなにかをもう越えてしまったのかも知れない。その先に待ち受けているものがなんであるかと私は受け入れなければならぬのだ。準備や覚悟などという話ではもうない。

私はすぐにシアトルを発った。

見送りに出てきたレイチェルは心配そうにしていたが、私は別れ

際になにかを感じたりはしない。玄関に立つ彼女が自分の妻ではないなにかであるという考えを、私は振り払おうとはしなかった。

つづく

第6話

2038年6月21日

ホテルダスクに着くと上官が苛立たしげに待ち構えていた。次の任務は追って知らせると言っている。不安は大きいがあれこれ考えても仕方がないか。

シアトルに届いたあの謎のタイムトラベラーからの手紙だが、考えてみるとひとつの仮説が浮かんできた。

あれを書いたのは別の私自身であるという仮説はどうだろう。妻への手紙を書いた当人かはわからないがそういう気がする。たまたまこの世界に“帰還”した別世界の私か、あるいは全く別の未来から来た私が今の私に危険を知らせようとした。気をつけるの一語だけでもそれらをわざわざ印字で書くというのが解せないところだが、切迫した事情から私になにかを知らせようとしたのだろう。謎めいた手紙だったがいいたずらや別のタイムトラベラーが私宛に書いたと想像するよりは余程自然だ。まあそれでも全くわからない手紙ではあるが。

危険であるのは百も承知さ。だが手を引いた方が賢明であっても私はこのホテルにこうして戻ってきた。

軍の忠実な駒だから？
いや違う。

このホテルと地下にあるあのマシンは人間の運命をたやすく飲み込む。引き返すことができないからだ。そして私は私の運命を、探り出してくれる。

2038年6月22日

次の任務を言い渡された。目的地は2033年のシアトル。目標は公文書回収。5年前に散逸してしまって現在は見る事ができないものらしい。内容は知らされないが今の軍にとって重要な文書で

あるとのことだ。私はに与えられたのはそれを回収してくるという至極簡単な任務だ。目標とする公文書館の保管庫には5年前の情報をつかんでいるからなのだろう、偽造のIDでアクセス可能で、元々軍部の文書だから渡された偽の命令書で十分通用すると言われた。またしてもわからぬことを言っている。腑に落ちない任務だ。大體散逸する文書など、公文書とは言わないだろうが。5年前に失われたというのは嘘だ。ただ確かなのは、上は現在では入手できないなにかの情報を手に入れようとしているということだ。

それはなんだ？

私は内容を見ることができののだろうか。

それに、またシアトルか……。あそこには今は戻りたくない。

5年前にも私はあの街に住んでいた。会いはしないだろうが別の者を送り込んだ方が上にとっても都合が良くはないか？

上が意図していることは相変わらず皆目見当もつかないが、マシンのテストとタイムトラベル理論の研究以上のなにかに着手しているのはやはり間違いないだろう。いや、前世紀の宇宙ロケット開発と同じで最初からそんなことは単なる方便でしかないのかもしれない。

出発は明日だ。

2038年6月23日

出発前に時間が空いたので私は食堂でゆったり昼をとることにした。上は必要最低限のことだけを伝えれば後は余計なブリーフィングもしないし命令書も渡さない。成功して帰ってくれば御の字で失敗でも痛くはない。そういう姿勢が見て取れる。

どれだけの捨て駒が使い捨てられているのだろう。失敗する私もいれば成功する私もいる。それでも軍は目的の文書を手に入れられる。私は成功しても帰る場所は正確にはこの世界ではないのだ。だから同じ理屈で別の私と同じ任務を与えられた別のテスト要員がここに私が去った直後のこのホテルに文書を持って戻ってくる。そういう

不思議だがまた残酷な計算が成り立つのだ。

私は捨て駒なのだ。だがその捨て駒が使い手の意図を知り過ぎたらどうなる？

上の連中はなにを考えているかは知らないが、見ているがいい。

食堂と言ってもここは1920年代のネオゴシック建築だ。気分は狂乱の20年代にタイムスリップしたかのよう、とでも言おうか。アルデコ調の内装は今となっては形容しがたい、ほとんど異様と言っていい雰囲気醸し出している。そんなかつてのホテルレストランが食堂として開放されたのは私が休暇でシアトルに戻っている最中だったそうだ。

我々タイムトラベラーは互いの接触を厳しく制限されていたが、その方針はどうやら転換されたらしい。

皮肉、という言葉も似合いそうもない。異様だ。前時代のホテルとそこに集うタイムトラベラーたちとはな。

片隅にはレストランには不似合いのテレビが食堂らしくつけっぱなしにされている。

昼の報道。食事中に舞い込んだひとつのニュースに私は釘付けになった。

シアトルで再び凶行。

買い物客で賑わう白昼のショッピングモールで無差別殺人。死傷者多数。

見覚えのある景色が飛び込んでくる。家族でよく買い物に行く郊外のショッピングモールが映し出されている。

犯人は一般客であふれる中央ホールに車でガラスを突き破って侵入、そのまま高速で数人を轢き倒して停止。その後車外に出て銃を乱射した。

……こんな惨劇が、離れてきたばかりのシアトルで、しかも近所の見知った場所で起きただと？

男は無差別に買い物を撃ちながら2階へ移動、そこで最後の犠牲者を撃つた後、自らの額を撃ち抜き死亡。

死者27人、というテロップがなにかの無慈悲な宣告のように画面を流れていく。画面の向こう側は紛れもない、シアトルのあのショッピングモールだ。この休暇の間にも家族で買い物に行った。その場所が今、凶行の現場となって、ブルーシートで覆われている。とても現実のこととは思えない……。

家族は無事だろうか。

他にも知り合いが巻き込まれていたりはないだろうか。

犠牲者の名前がテロップで流れていくのを私は眺めている。

ああ、これはなんとという無残な仕打ちだろう。不運にも犠牲者となった彼らはこうして、ひとり4、5秒で流れ去るテロップによって自らの死が世間に無情に報告されていくのだ。無様だと言ってもいい。

晒しものの死亡通知か……。浮かばれない。彼らがあのテロップに名を連ねることになってしまった理由はなんなのだろうな。そんな理由ありはしないのだろう。一体どこにあるというのだ？

単に折り悪くそこに居合わせてしまった、ただそれだけ。“折り悪く”という一語が彼らの運命を冷酷に物語っている。いや、運命も、因果もないのだったか。

テロップは無情に流れ続ける。最初に見た名前が出てきたので一巡したのだろう。知った名前はない。そしてそのテロップの上では事件後の惨状がまざまざと映し出されている。頭から血を流しながらインタビューに応える者もいる。家族か知人が犠牲になったのか、泣き叫ぶ者の姿も見える。現場はひどい状況だ。地獄のようだと言ってもいい。実際当事者にとっては地獄なのだ。狂った殺人者がひ

とり現れただけで一変してしまつた彼らの日常……。

だが私はこの惨状を横目に見ながら初めの緊張が解けて、食事を再開していた。家族や知人が巻き込まれてはいないようなのだ。よかつた。

……よかつた？

自分の近所がこんな殺人の舞台になつたというのに？

あの泣き叫んでいる女はどうだろう。夫を殺されたのかもしれない。あるいは目の前で酷たらしく殺されたのかもしれないじゃないか？

そんな悲劇を尻目に多くの人がその放送を垂れ流しにしながら残酷にも昼食をとっているのだ。中にはよかつたと思う者もいる。近所に住む私でさえ家族や知人が巻き込まれていないと知れば他人事になるのだ。他人事ならテレビで放送されたところで人間が無様に殺されたというおもしろくもない世間話が茶の間に届くだけだ。泣き叫ぶ女の映像が垂れ流しにされるテレビの前だろうと頓着しない。いぎたなく昼食をとりもする。それでも自分は無関係なのだ。

彼らは“折り悪く”当事者となつてしまつた。その彼らを選定したのは運命でも因果でもない、救いようのない“運”なのだ。そうでない現実もいくらでも存在するのだからなおさら浮かばれない。

昼食を終えたら次の任務のために地下に降りなければならぬ。犠牲者の中に知つた者の名前はなかつたのだ。自分の知つた場所が殺人の舞台になつたことはショックだが、この事件も結局は他人事なのだ。そう片付けてしまいたい。

犯人が最後に殺害したのは自分の妻子だつたらしい。リポーターがそう伝えている。となると、犯人の男は初めから家族を殺すつもりでショックモールに飛び込んだのか。いや、それともこの狂人の妻と子も、折り悪くあの場所に居合わせてしまつただけなのだろうか。そして狂つた夫に無残にも殺された？

逃げ惑う見ず知らずの他人を何人も殺して、最後に妻と子を殺して自殺する。この狂つた男は一体なにがしたかつたのだろう。そし

て殺された無関係な犠牲者たちは一体なにを思えばいいのだろう。ただ見えてくるのは仮借なき不条理だけだ。

家族はどうしているだろう。レイチエルとアリスは今頃家にいるのだろうか。

いるはずさ。とにかく事件に巻き込まれていないことは確認できた。だから今はそれだけでも安心するべきなのだ。当事者となった者たちの悲惨な運命は想像するだに惨めなものだが、そんなこと無理に考えようとしないでいいのだ。私は神でも、聖人でもないのだから……。私は昼食を終えて席を立った。

レイチエル、

……レイチエル？

名前が見える。妻の名前が一瞬だけ見えた、気がする。

ちよつと待て、見間違いか？テロップはもう流れ去ってしまった。

……見間違いに決まっている。こういった事件は今までもいつだって他人事だった。

そうだ、他人事であるべきなのだ。当事者になってしまつところなど、一体どこの誰が想像する？そんな想像普通ならしない。到底受け容れられるような有様ではないのだ。だからこういう事件を見たら誰だつて無理にでも他人事で片付けてしまおうとする。

テロップは流れ続ける。一巡するにはまだ時間がかかる。犠牲者はさつきよりも増えているようだ。

遅い。流れていく犠牲者の名前……、その流れはあまりに遅い。焦らされる。どうしてそうゆつくり流れるんだ。ええい速くしろ。

遅い、遅い。こうして悠長に流れていく彼らの名前とは、存在と一体なんだ？人間として扱われているとは思えない。邪魔でしかないじゃないか。

流れて、きた。

妻の、名前だ……。

見間違いではない。同姓同名の別人でもないのもわかる。その証拠に妻の名前の次には、

アリス・ノース シアトル 身元確認済

娘の名前が、確かに流れていく……、消えていく。

ガチャン

手に持っていた食器類が床に落ちた音がした。

なんて、ことだ。最初に見たときにはなかったのに、見落としたのか？

これは現実ではない……。

現実ではない。これはこの狂ったホテルの見せる狂った幻だ。そうに決まっている。

だが、ああ、また見える。もう何巡したのだろう。妻と娘の名前が無慈悲に画面を流れていく。私の家族は、ひとりの狂人によって今日、殺された……。

愛する妻と、娘の名前……、名前。名前が、まだ見覚えのある名前が、見える？

私の名前だ。自分の名前が見える……。

ハハ、ハ、これはなんというひどい夢なのだろう。家族が殺された上に自分まで殺されたというわけか……？これはひどい。

しかし自分の名前はよく見るとテロップの上にある。どうして気付かなかったのだろう。放送の最初から流れずずっとそこにあっただの。なぜなら私の名前はこの凶行の最後の死者として挙げられていたのだから……。

気づくと食堂の客たちが不審げにこちらを見ている。食器類を盛大に取り落としたのだ。それに無様に悲鳴を上げたりしたのかも知れない。これは現実ではないと連呼している自分の声がどこか遠くのほうに聞こえる。私の顔と名前……、最後の死者。

犯人は私だ。

つづく

第6話（後書き）

あとがきはブログに書いています。こちらではフォントを変えたりしてまいります。もしよければおいでください。

<http://ameblo.jp/ceryeti/>

本作はここで一時中断です。

コメントお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8196o/>

とあるタイムトラベラーの手記

2010年12月8日23時40分発行